

第三章 おわりに

一羽の折鶴によって、その出会いによって、そのご縁によって、お互いに運命的な巡りを感じ、さらに、広島天明展を機縁として、開催者の小田女史（オサダ姫）とともに全面的支援をしてくださったグループの皆様とも、人生を変える運命的出会いとなって、今なおご縁が続いています。

こうした『折鶴』の出会いのような共振共鳴共時性現象は、多くの場合単なる偶然として見すごされがちです。

ソウル・ツアーから始まった出会いの流れを追って見たとき、日ごろの自分の心についてつくづく考えさせられるのです。

心の中で起きていることは、必ず自分の前に時空を越えてやってくる、必ずお目見えするということを、体験を踏まえて実感させられ、そのとき、偶然という感覚は消えましよう。

実はその流れは、一過性の表情ではないのです。延々と流れる心のドラマの一場面に過ぎないのです。

私（田之助）は、この話で、スイスのカール・グスタフ・ユング博士に登場していただきました。欠礼のないよう気配りをしながら、心の国には、いのち舟の客人として登場していただきました。ここ東北の酒田港に接岸している、田之助というは姫の宝船にも来ていただきました。話の最後では、つる姫とご一緒に天の川に帰られ、親様からいただいた特製のいのち船で天の川本流を下り、支流のライン河でスイスの故郷、チューリッヒ湖畔まで戻っていきます。ライン河は約一三三〇kmという大河です。

ユング博士は晩年、シンクロニシティー（共時性現象）に魂を打ち込まれたといわれます。いわゆる共時性の元祖だと私は思っています。ユング博士が、広島を舞台とする折鶴に秘められた共時性をどのように受け止めてくれるか知りたいところです。

岡本天明氏は、世界にも類例のない「数字と記号」による神示取り次ぎの自動書記を

一六年間も続けてこられました。画家でもあった天明氏の故郷は『倉敷市玉島』です。元安川の「もとやすはし」（元安橋）で、それも雑踏の人込みの中で、無傷で、一羽の折鶴が、北国の人たちと出会って、拾い上げられました。

天明展を見た帰りに、天明氏を証す「倉敷市玉島」と大書された折鶴と出会ったという事実。その文字が「僕は天明です」とひびかせているようです。それを尊く受け止めねばなりません。

さらに、数字によって天明氏を証すひびきの一つに、出会い時間と日月神示がありました。出会いは「一二時一三分」であり、日月神示は「日（一二）、月（一三）に符号するひびきでありました。

また、「もとやすはし」（元安橋）を数霊で見れば、「元八四八四」のひびきともなります。折鶴と出会ったいろは姫が、「いろは四八文字」ということになりますから、四八の共振共鳴ともなりましょう。

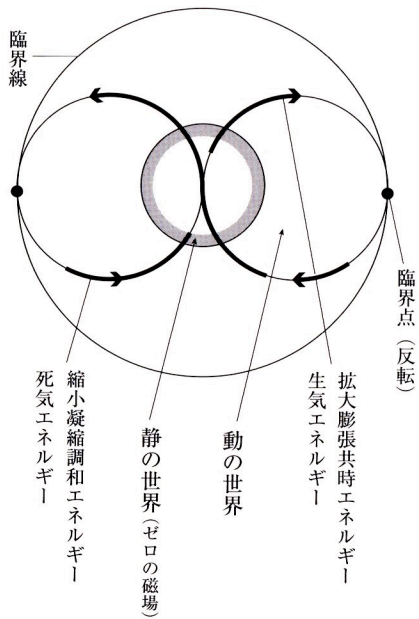
いろはだけではありません。当日の広島平和記念式典は、「第四八回目」となっています。四八回目の祈念の日に、元八四八四（元安橋）で、いろは姫が折鶴と出会いました。いろは「四八」字が共振共鳴するだけでなく、この折鶴の記録さえも、第四八話に

入っていました、その強烈なまでの意志性を感じさせられます。
 ともに触れあい、

ともにひびきあい、
 ともに時を同じくする

こうした出会いの世界、ご縁の世界では、どうしても、いのちの「意志性」を無視することはできません。

- いのちの中心は
- 意志性
- 調和の意志性
- ゼロに戻す力の
- 意志性
- 心身調和安定の
- エネルギー
- それが



【生命8字環流】

いのちの中心力

何ごとも思いが先のこの世かな
魂は出会いの縁によって進化し

出会いの縁は進化の方向性を持つている

と思うのです。そこには逆進化のあることを思うとき、一にも二にも日々の心の大切さを肝に銘じなければなりません。

人々の運勢運命というものの根底には、心の方向性こそ最も大切なこととしてあるのだと私は自覚するようになりました。

共時性現象の体験からは多くのことを学ぶことができました。そして、広島天明展と折鶴との出会いがあつた翌年のことでしたが、私（田之助）の心に次のような思いが押し上げてきました。左手書きの訓練を始めて三年四月目のノートから、全四三首の内、二〇首を抜粋しましたので、ここに紹介させていただきます。

「証しの灯」（抜粋）

平成六（一九九四）年六月一七日午前一〇時五二分

待ちに待ち

今になぞるよ

神の道

近くなり

今にあたうぞ

波くるごとく

ありがたき

うたにながせる

神一途

待ちわびた

そなた心の

まなびくに

なきてなかせぬ
神の道

あいしても
あいにかわりは
なきものよ
天の恵みの
すべての愛ぞ

ようやった
ここにくる日が
遠かりしも
なにもまして
うれし君なる

ながき世に
うつせしたまの
あるを知り
かかせぬこの身
今うきかよう

うれしきぞ
なんでうれしき
まこと道

世のはじまりに
来れましわれは

とうとき世
正しくとうとき
あの世まで

通して一本
世はうきしずみ

あるもなし
なしもなし
なにごとあらむで
知るもなし
宇宙にあるは
無の無

清らかに
生きまことの
道あらば
そこに歩むぞ
人の道

みているぞ
うそとおもうは
はかなきぞ
天も地もみる
中の中まで

ありがたき
いのちの証し
ころして
ゆくにゆく道
かがやく道ぞ
まろはよし
君もよし

たまのしずまり
世のしずまり

証し人

ゆくもかえりも
なきいのち
尊く歩めよ
わが道あかり

死もなきぞ

生もなけれど

道はある

流れる如くに

神の手と足

ただあゆめ

歩めよ歩め

神の道

調和の道を

歩め先々

証し人

証しの道は

鳥海の

峰に通じた

あの日のまこと

天も地も

恵みの愛は

かわらぬも
人の心は
今に今ぞえ

争いは
生きてたたれる
道ならば
今を正しく
神とともども

またの日を
待たれよまろは
君をまた
逢えてなつかし
日々を待たれよ

肉体は消えても魂は消えない。魂が不滅だからこそ歴史は繰り返されるといふ。気分がいい歴史なら大歓迎であるが、昨今の核とミサイル問題を思うとき、そして国際間での闘争の歴史を思えば、こうした魂は本当に永眠願いたいものです。

新しい心をどんどん歴史の中に吹き込まなければなりません、それには歳月が必要です。

魂が生き続けているから歴史が成り立つのであって、肉体と一緒に消えるのだとしたら、自分という存在は、まるで空っぽになったドラム缶と同じでしょう。宇宙創成から、延々と続くいのちの聖火ランナーで現在までつないでくれたから、その蓄積に蓄積を重ねた心の集積が魂となって実存するからこそ今を生きているのであって、魂も肉体と一緒に消えるのであれば、何もかも、歴史も何もかも、この世から消えてしまうということです。

ただ、魂にも当然、世代交代のような、新しい心との間に新陳代謝はあるでしょうが、具合の悪い魂は、例えば、闘争の魂などは、どうも執拗に生き残ろうとしているようなのです。だからこそ新しい魂の新風で爽やかな魂の風をどんどん入れてやらないと、嫌

な歴史の繰り返しは絶対にしてはならないのです。

心は生き物だ！ 本当に生き物だ！ 心は縁結びの達人だ！

気分のいい出会いの縁が結ばれるように、日々の心を管理したいと自覚しています。

ここまで、元安橋で出会った一羽の折鶴を介して、心と、出会いと、縁結びと、運命的本縁について体験内容のスタイルを変えて書き進めてきました。

『元安橋』の一羽の折鶴は、岡本夫人にも、私（田之助）と妻（いろは姫）にも、ご縁の皆様にも、人生の風景を変える道明かりになりました。折鶴は共振共鳴共時の道明かりでありました。

青く澄んだ

いのちの星 “地球”

地球初の洗礼

原爆の傷跡まだ癒えず

人類初の洗礼 “広島”

原爆の傷跡まだ癒えず

そして “長崎”

地球も広島も長崎も

魂の傷いまだ癒えず

広島

元安川の

元安橋に降りた

一羽の折鶴

平和のシンボル

万霊の集いに集う元安橋

元安らぎの河原に集う万霊万魂

万霊集う平和の集い

元安らぎの元安橋に

一羽の折鶴が降りた

平和の折鶴が降りた



折鶴を受け取る岡本夫人



一粒米

折鶴との出会いから、いつしか月日も過ぎたある日のこと、天の川をつる姫から、岡本夫妻（天明と三典）に招待状が届けられました。以前天明は、天の声から、「いずれ夫人とともに招待するからその日を待たれよ」と、招待の予告を受けていたのです。岡本夫人は、そのことを、いろは姫にも知らせてくれました。

知らせを受けたいろは姫は、何をお祝いにしたらいいものかと考え、宝船の「食心丸」をプレゼントすることにしました。それを聞いた岡本夫人は感激しました。

いよいよ岡本夫妻（天明と三典）は、食心丸に乗って天の川へと出発したのです。万風を帆いっぱいにくぐらませ、帆柱の先端には、「一粒米」の旗をなびかせて、一路、天の川の上流へと進み、さらに、源流の、いのちの原子へと進んでいったのです。

それは、平成二一（二〇〇九）年六月二日から二三日にかけての未明のことでありました。

あとがき

一羽の折鶴が証した魂不滅の真実。死んでも心は生きている証しのシンボルとなって、原爆ドーム前の元安橋の上で待っていた小さな一羽の折鶴。どこのどなたが運んだのか、それも、新聞の折り込み広告で折られた折鶴でした。

「二二時二三分」で「倉敷市玉島」の折鶴が待っていました。亡き天明の魂が待っていたのです。ここで出会うまでの、心の世界の、水も漏らさぬ絵図面を歩ませ続けた縁のメカニズム。それは、生き生きと輝く魂たちの意志の仕組みがあつたからに違いありません。

現実と非現実、あの世とこの世、生と死…いずれも、いのちの中で、融合一体となって組み込まれているものと、その実相の世界を考えてみる事ができるのです。

一連の出会いの流れを振り返れば、出版社が募集した韓国のソウルツアーが縁のポイントとなっています。そこで知り合ったのが広島の小田様でした。全

国に配信された新聞記事の「数字と記号」による一六年間にわたる自動書記と天明絵画展の開催を知り、主催者としての小田様が再登場したのです。平成五年八月六日には、天明夫人と出会い、亡夫・天明の出生地が「倉敷市玉島」であること、と同時に「日月神示」の事を知りました。次に、帰路の途次、原爆ドーム前の元安橋の上で「一羽の折鶴」と出会います。「一二時一三分」のことでした。折鶴を開くと、太く大きな文字で「倉敷市玉島」と明記されていたのです。これは、天明の魂の証しだ、と直感して、天明夫人に届けることになりました。そこには、一連の縁の流れをみることができます。

両手ですくうようにして折鶴をおしただいた天明夫人は、感激で涙をうるませていました。この一瞬の出会いを境にして、天明夫人は運命性が一変したのです。

夫は生きている！ 夫の魂は生きているのだ、という確信は決して薄れることはなかったものと思われまます。以後、亡くなられるまでの一六年間、折をみても折鶴を開いては戻し、開いては戻して、多くの人に、天明の、魂の証しとして話し続けたのです。

折鶴は破れる寸前になり、夫人が亡くなられる半年前に私の妻宛に送り届けられて来ました。そして、亡くなられる一二日前には、一通の書簡が届けられたのです。

ここで、その手記の一部を紙上を借りてご紹介させていただきます、あとがきに代えることにします。

■ 『岡本夫人の書簡』（絶筆の抜粋）

……前略……一九九三年、平成五年八月六日、広島におきまして、天明画展を開かせていただいたとき、小さな折鶴をいただいたからでございます。それは、この世始まって以来、最初に最後のただ一度の出会いでございます。この時、大宇宙と、地球上の折鶴のいのちはこの世始まって以来初めて、深い愛のひかりで結ばれたのでございます。

空前絶後の、言葉に尽くせぬ、深く熱い想いでございました。大きなよろこびでございます。

日月神示に寄りますと、この出会いは、この世の最初からの経緯（四九三）であると明記されているのでございます。

はるかに長い気の遠くなる様な、億万年の想いの込められていた日でございました。人間の心を越えた廣大無辺の宇宙の、切実な愛を深く感じるのです。平成五年八月六日、この日、この時が大切だったのです。一枚の広告の紙は、人間に生死のないことを現しております。

天明は、肉体浄化して、はじめて自分の五体は食によって生かされていたと知りました。神示を書き、絵をかいたのも、自分だと思っていたが、食によって、書かせていただいていたのだと。

天明が郷里の文字に生き、とかわれていたことは、いのちの永遠を悟らせてくれました。表は色の花模様で、裏を返しますと、倉敷市玉島と、天明生誕地が印刷されておりました。

「あ、これは天明さん生きている」と、直ぐ届けていただくことが、出来たのでございます。一体、何処の、何方が折られたものでありましょう？

一六年前に、こんな不思議なことが、起こったのでございました。折鶴を開きますと、米の字が現れます。米の字は、この世でただ一つの、中心のある最も大切な大切な字なのでございます。

中心のあるこの字は、宇宙そのものを現していると申せます。折り目はひかりであり、四方八方へと無限に広がって行く線ですから、……中略……折鶴は、我が国古神道の奥義でございます。折り紙といえば、すぐ折鶴とおもうほど世界の人々に愛されております。人々に幸せをもたらすものとして、広島のパルコ公園には、世界の人々から、供えられているのでございます。平和公園からは、少し離れた、元安橋の上で拾われました。……中略……広島は、人類が初めて原爆を落とされた地です。今も、苦しめられている人々があり、まだ自分のいのちがどうなったか、よく分からない霊が、充ちていると思われれます。

平成五年八月六日、折鶴と日月神示の出会いの日は参りました。もしお会いしていなかったら、日月神示の難解な数の羅列の一六卷、ア9の○木（アレノマキ）を、誰が読むことが出来るでしょう。誰にも読めなかったものが、読めたのは折鶴でした。この日を一番待っておられたのは、日月神示でございます。

す、宇宙そのものも世の元にご自分で仕込まれその時の来たことを、一番よろこばれたに違いありません。……中略……平成五年八月六日、人間にいのちの尊厳に気づけよと、共時が起こったのでございます。日月神示の中に、何度も出て来ます。世の元の一厘の経緯（仕組みⅡ四九三）と申しますのは、折鶴が世にお出ましになることでもございました。折鶴は、〇でいらつしやいます。食芯の芯の芯でいらつしやいます。無のいのちでいらつしやいます。……中略……折鶴は、新聞の折り込み広告で折られておりました。確かに、この度のことは、全く新しい出来事です。私は、毎日、驚きを深めております。日本は神国です。正に二十一世紀の神話でございます。

平成二十一年六月十日 岡本 三典

書簡は長文でした。書簡を記されてから一二日後の、六月二二日から二三日にかけての未明、岡本夫人は、享年九二歳の天寿を全うされたのです。

平成二三年七月吉日 著者 菅原 茂

著者略歴・菅原 茂

昭和九年（一九三四年）山形県生まれ

山形県立酒田商工高等学校（現・酒田商業高等学校）卒業後、農業協同組合、商社、ダム工事、海中工事、ビル専門防水工事、旅館業、不動産取引業等を経て、自己改革と生命世界（生きる原点・心の原点）と共時性現象について、妻と二人三脚で探索を続けている。その間、鳥海山麓の原野を開拓、十二年間、鶴亀農場を体験。

著書

「酒乱（米のいのちが生きるまで）」（株）東京経済。「死んでも生きているーいのちの証し」（株）たま出版。

フォトエッセー「いのちのふる里」、「いのちの顔」等。

「神秘の大樹シリーズ第一巻（偶然が消える時）」おりづる書房。